

人文学部紀要最終号に寄せて

学長 廣川俊男

新潟産業大学が四年制大学として開学してから六年後の、一九九四年に新規開設された人文学部は、この三月末日で十六年の歴史を閉じる。これに伴い、研究紀要も最終号が編集されることになった。

人文学部紀要の創刊号は、開設年の十二月に発刊されている。成長・拡大志向を時代背景に、急速に広がりつつあった環日本海諸国との経済や文化の交流の担い手育成を掲げた本学部「環日本海文化学科」がマスコミにもしばしば取り上げられるなど、注目された時期でもあった。創刊号の巻頭言と十一篇の論文にはその意気込みが溢れていた。例えば、当時の学長金田一郎先生は、創刊に寄せたご挨拶の中で、人文学部紀要について「本学人文学部のこれからの教育・研究活動を導く指針として、また、環日本海圏諸国の文化研究及び文化交流を先導する旗手としての役割をも果たしてくれるよう、期待してやまない。」と述べておられる。そして、その後も競うように研究成果が持ち寄られ、十篇を超える論文の発表が二、三号と続いた。

まだ若かった私にとっては、専門分野が全く異なる先生方の研究に接することも、ご指導、ご助言を受けることも新鮮、且つ、実に刺激的であった。いつも発刊を心待ちにし、ワクワクしながら読み耽ったものだった。

こうして振り返ると、懐かしい先生方のお顔が次々に浮かんでくる。また、一緒に取り組んだ研究活動のこと、平成七年秋に柏崎と長岡を舞台に開催された「第三回アジア太平洋国際シンポジウム」や人文学部開設十周年記念イベント「ことばのひびき」など様々なイベントのこと、仲間と夜遅くまで討論したこ

となどが思い出されてくる。残念ながら既にお亡くなりになられた先生方もおられるが、今でもお元気で
ご指導・叱咤激励を賜ることができる先生方も大勢いて下さり、有難いことである。そして、人文学部に
開設時から関わり、その発展を心から願ひ、常にできる限りの努力をしてきたと自負している自分にとつ
ては、学部がなくなることも、二十一号目となる本号が人文学部紀要の最終号になることも、正直に言っ
て寂しく、先輩諸氏に対しては申し訳ない気持ちになる。

しかし、十六年にわたり育て送り出し続けてきた卒業生が社会で立派に活躍してくれている事実や、積
み重ねられた研究成果とこれを発信してきた人文学部紀要の果たした役割は、本学の歴史の中で輝き続け
ることだろう。

今後、人文学部のヒューマンリソースは、コンパクトユニバーシティを宣言し再編された経済学部文化
経済学科に引き継がれることになった。研究も教育もそこで継続される。教員の専門分野・研究分野の成
果を学生達に少人数の演習形式で教える教養ゼミナールを新設するなどの新しい試みも加えられている。
新しい時代のニーズにも積極的に応える活動を展開することや地域が求める成果を生み出すことにも精を
出さなければならぬと考えるものである。

人文学部紀要最終号刊行が、次の飛躍へのステップになってくれることを期待したい。

(二〇〇一年四月～〇五年三月人文学部長、〇九年四月～一〇年三月〈学長兼職〉人文学部長)